

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720179

研究課題名(和文) モンテーニュにおける宗教・哲学思想の変貌 トリエント公会議を背景に

研究課題名(英文) Metamorphoses of religious and philosophical thoughts in Montaigne - in the context of the Council of Trent

## 研究代表者

久保田 剛史 (KUBOTA, TAKESHI)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60555382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：トリエント公会議にはじまるカトリックの改革運動は、16世紀後半のフランスにどのような反響をもたらしたか、モンテーニュの宗教・哲学思想にどのような影響を与えたのか。本研究ではまず、1660年代におけるカトリック陣営による論争文の出版や宗教戦争、さらにはピュロンの懐疑主義とキリスト教思想との融合について検討したうえで、そうした宗教的・政治的事象がモンテーニュの思想や作品形式にどのような変化をもたらしたのかを考察した。

研究成果の概要(英文)：What reaction has caused the Council of Trent had on France in the late sixteenth century? What influence has the Counter-Reformation had on the religious and philosophical thoughts of Montaigne? In this study, we examined the publication of post Tridentine Catholic polemical works, the religious wars and the vogue of Pyrrhonian skepticism, in order to consider how these political and religious elements of the 1660s changed the thinking and writing of Montaigne.

研究分野：人文学

キーワード：仏文学 思想史 モンテーニュ トリエント公会議

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点は、フランス国立・ポルドー第三大学での博士論文「モンテーニュと聖アウグスティヌス：ルネサンス期における『神の国』の解釈 Montaigne et saint Augustin : lectures de la Cité de Dieu à la Renaissance」(2009年に受理)での研究調査にさかのぼる。研究者は、同論文において、アウグスティヌスの『神の国』がモンテーニュの思想のみならず、『エッセー』の作品形式にも与えた影響を明るみにした。しかし、その後も調査を続けたところ、16世紀後半のフランスにおいては、『神の国』をはじめとするギリシャ・ラテン教父作品の多くが、対抗改革運動(トリエント公会議以降のカトリック側による宗教改革)という特殊な文脈のもとで受容されていた点に気づいた。そのため、16世紀後半のフランスにおけるトリエント公会議の影響力も踏まえ、モンテーニュの人間観や宗教思想について再考察する必要性が生じた。

モンテーニュの宗教思想については、いくつかの先行研究(ドレアノ神父、アンドレ・コンパロ、アラン・ルグロなど)が存在するが、いずれも教父作品と『エッセー』との関係をほぼ直線的に捉えたものでしかなく、『エッセー』が執筆された当時の宗教的・政治的文脈を精密に検討したうえでの研究ではない。また、近年では、フランス政治史やキリスト教教義史の分野からトリエント公会議について論じた研究(ベルナル・セズブエ、アラン・タロンなど)も存在するが、いずれもトリエント公会議が16世紀後半のフランス文学に与えた影響については、ほとんど指摘していない。

したがって、トリエント公会議以降の宗教・政治的背景を視野に入れながら、モンテーニュの哲学・思想について考察することは、モンテーニュ研究において斬新な試みであるばかりか、近代フランスの宗教思想史について考えるうえでも、新しい論考の手がかりを与えてくれるにちがいないと察したのである。

## 2. 研究の目的

以上の動機から、トリエント公会議が16世紀後半のフランスにもたらした諸問題を解き明かしながら、公会議以降の神学的・政治的・文化的文脈がモンテーニュの思想形成に与えた影響を指摘するとともに、モンテーニュの哲学・宗教思想に見られる独自性を示し出そう、というのが本研究の目的である。

より具体的には、対抗改革をめぐるプロテスタント側の反応(論争文集の出版)、公会議の決議事項を広めるためにカトリック側が行った文化的戦略(公会議文書や教理問答などの流布)、フランス聖職者と国王との関係(フランス宗教戦争)、人文主義に対する公会議の影響(キリスト教思想と古代哲学との融合)などを射程に入れたうえで、『エセ

ー』を読み解くことが、本研究の主旨となる。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の第一資料である『エッセー』の諸版(1580年版、1582年版、1588年版、1595年版)を比較しながら、加筆文や削除文の検討を通して、モンテーニュの哲学・宗教思想がどのように変貌を遂げたのか、明るみにすること。

(2) トリエント公会議に関する歴史・神学的研究書を読み解く。さらには、カトリック神学者たちによる論争文集や神学書、カトリック教理問答についても、できるかぎり広く調査を行い、公会議での決議事項やその受容が16世紀後半のフランス宗教思想に及ぼしたインパクトをもたらしただのか、明らかにすること。

(3) トリエント公会議が当時のフランス人文主義に及ぼした余波について考察すべく、16世紀後半にフランスで出版された人文主義関係の作品を読み解くこと。とりわけ、当時のフランスで最も受容された古代思想といえ、ピュロンの懐疑主義である。そのため、本研究では、16世紀後半における懐疑主義とキリスト教思想との融合に着目しながら、トリエント公会議との関係について考察を進めることにした。

## 4. 研究成果

(1) モンテーニュは『エッセー』において、「私は加筆するが、訂正はしない j'adjoute, mais je ne corrige pas」と主張している。しかし、第一巻56章や第二巻37章などの諸版において、大幅な削除や訂正が見られることは、すでに知られている。しかし、今回の調査を通してさらに分かったのは、モンテーニュがとりわけ宗教や政治といった、世間に波紋を広げるおそれのある議論に関しては、細心の注意を払って文面を書き改めたという点である。本研究では、モンテーニュの宗教思想を考察するにあたって、おもに第一巻56章「祈りについて」、第二巻3章「ケオス島の習慣について」、第二巻12章「レーモン・スポンの弁護」を精読したが、いずれの章にも削除文や加筆文が見出された。

「祈りについて」では、カトリック教会への服従、聖書の翻訳や読解、祈りおよび信仰の定義、神の超越性といった、信徒の宗教感情に深く関わる話題を遡上に載せている。とりわけ聖書の翻訳や解釈をめぐる、トリエント公会議の第四会期において論じられたアクチュアルなテーマである点にも注意すべきであろう。そのため、モンテーニュがくり返す加筆訂正からは、当時フランスに広まりつつあった公会議の教義に忠実であろうとする姿勢が見受けられる。その一方で、「祈りについて」では、古代ギリシャ・ローマ作家からの引用や借用が加筆されてゆく点にも注目しなければならない。つまり、カトリック教会に対する強い服従を標榜しつ

つも、あくまでも人文主義者として宗教的問題を論じようとする「カトリック人文主義者」モンテーニュの立場が、彼の加筆や訂正から認められるのである。

なお、「祈りについて」をめぐるのは、2011年12月に、フランス国立・ピカルディー大学ベネディクト・ブドゥー教授が青山学院大学にて講演を行った。その講演を通訳して記事にしたのが、後述の「その他」の欄にある翻訳記事である。

また、「ケオス島の習慣」では、自殺の是非がテーマになっているが、これもトリエント公会議にて論じられたアクチュアルな議題であり、『ローマ教理問答集 Catéchisme romain』において自殺が禁止されている点に注目すべきであろう。モンテーニュはここでも（加筆をくり返しなが）教会への服従を強調するものの、章全体の内容としては、自殺に関する賛否両論をただ列挙するのみであり、自らの主張はあえて明言しない。古今東西の多様な例が加筆されていることから、モンテーニュが自殺という問題を、習慣や風習といった、宗教を超えたという人類学的観点から論じようとしている点が理解できよう。

さらにモンテーニュは、「レーモン・スポンの弁護」の後半部分において、理性能力に対する批判を強調すべく、古今東西の多様な神学説や哲学思想を書き加えている。それらの多くは、神の擬人化や自然・宇宙に関する理論であるが、加筆部分（多くは88年版以降のもの）は、アウグスティヌス『神の国』からの引用・借用が大部分を占めている。モンテーニュは、対立しあう諸学説を列挙することで、いかなる学識も不確かであることを証明し、判断保留を要請しているのである。ここでは、懐疑主義的論証法（イソステネイア）のための有効な材料として、キリスト教思想が援用されている点が見てとれる。

しかしながら、これら二つの章の分析に関しては、トリエント公会議以降の神学的・哲学的文脈に照らし合わせて考察するなど、さらなる検討課題が残されている。そのため、より精緻な分析に関しては、以降の研究課題としたい。

最後に、上述した『エッセー』の読解作業をもとに、モンテーニュが宗教戦争を描出する際に用いた暗示技法と、『エッセー』に見られる彼の宗教的寛容や非暴力主義に関する論考を発表した。それが後述の論文である。この論文では、（古代人の戦争や残虐行為を通して当時の宗教戦争を暗に非難する）モンテーニュの平和主義について論じるとともに、（古代と現代の個別的事象を区別せずに人間の本性を探求する）モンテーニュの人間観について指摘した。

（2）多くの障害によって中断されながらも、

18年間も続いたトリエント公会議（1545-1563）は、「聖書と伝統」、「信仰と義認」、「聖体の実質変化」といった教義を再定義することで、その後四世紀にわたるカトリック教会の新しい姿を決定づけることになった。公会議が定めた決議や規則は、ヨーロッパ各地のカトリック諸国にも教義上・制度上の刷新を促すことになる。とりわけ本研究では、1560～70年代にフランスで出版された教理問答や論争文集を調査することで、当時のフランス・カトリック教会に対するトリエント公会議の影響について検討した。

トリエントの革新的精神は、16世紀後半のフランスにおいて、宗教戦争およびガリカニズムによる抵抗を受けることになる。とはいえ、公会議の終了直後からすぐに、改革決議の内容が国内でも流布しつつあったことは事実である。当時のフランスで、いち早く対抗改革運動を普及しようとした人物が、シャルル・ド・ギーズ（ロレーヌ枢機卿）である。公会議の出席者でもあったシャルルは、ランスやパリの印刷業者と連携しながら、1560年代に多くの公会議関連書籍や宗教論争文を刊行させている。

こうしたシャルル・ド・ギーズによるカトリック陣営の出版戦略において、最も大きな役割を果たした人物は、ジャンシャン・エルヴェであろう。エルヴェはカトリック神学者として、公会議の決議文書を1564年に仏訳したほか、ユグノーに対する数々の論争文を出版し、カトリック教会の教義を弁護している。さらに、人文主義者でもあったエルヴェは、セクトゥス・エンペイリコス『学者たちへの反駁』のラテン語訳（1569）とアウグスティヌス『神の国』の仏語訳（1570）を発表しているが、いずれの訳書においても、序文のなかで、カトリック教会の論敵たちを非難したうえで、これらの著書がカトリックの正当性を証明するものであり、真のキリスト教信仰に役立つという旨を主張している。

以上の点については、後述の論文で調査結果をまとめた。いずれにせよ、ここで注目すべきは、セクトゥス・エンペイリコスとアウグスティヌスの翻訳が、カトリック陣営による論争文集の延長として出版されている点である。本研究では、時間的な制約もあり、エルヴェの著書や彼による訳書を読み解きながら、トリエント公会議以降のカトリック陣営に見られる主張を探り出すことに開始した。

しかし、エルヴェの翻訳が当時のフランス作家や思想家に与えたインパクトは大きいはずである。モンテーニュの『エッセー』においても、とりわけ「レーモン・スポンの弁護」において、セクトゥス・エンペイリコスとアウグスティヌスからの借用が目立っている。そのため、エルヴェの神学的・哲学的主張がモンテーニュの思想に及ぼした影響に

についても検討する必要があるだろう。この点に関しては、今後の課題としたい。

(3) トリエント公会議の終結とともに、改革運動の試みがヨーロッパ諸国にも広まりつつあった当時、フランスでは人文主義者たちの間で、「ピュロンの懐疑主義」が空前の人気を見せていた。その流行の発端は、セクストゥス・エンペイリコスの翻訳に起因しており、懐疑主義がキリスト教の信仰を支えるべき思想的材料と見なされていたのである。上述したように、ジャンシャン・エルヴェは、聖体の実質変化を否定した新教徒の知的傲慢さを非難すべく、『学者たちへの反駁』を訳している。また、アンリ・エチエンヌは、無神論者を宗教的伝統に服従させるための手段として、『ピュロン主義の概要』を訳している。

こうした「キリスト教的懐疑主義」は、モンテーニュにも大きな影響を与えているのは明白である。『エッセー』の「レーモン・スポンの弁護」や「びっこについて」などの章でも、宗教的習慣にしたがって、節度ある信仰と知的謙虚さを保つことを説くほかに、人間の知性を超えた出来事に関しては、あくまでも判断を保留することを勧めている。モンテーニュにとっての懐疑主義は、理性の思い上がりなく、キリスト教信仰に正当性や普遍性を与えるための手段であり、彼の信仰主義(フィデイズム)にきわめて合致した異教思想であることは言うまでもない。「モンテーニュの城館」にある書斎の梁には、モンテーニュによって刻まれたギリシャ・ラテン語の格言が数多く残っているが、セクストゥス・エンペイリコスの言葉が聖書からの引用文と並び合っていることから、懐疑主義とキリスト教信仰がモンテーニュにとって重要な精神的支柱であることを物語っている。

とはいえ、モンテーニュにとっての懐疑主義は、キリスト教信仰を支える精神的基盤であっただけでなく、『エッセー』をたえず執筆し続けるための原動力でもあった点にも留意しなければならない。ピュロンの懐疑主義者モンテーニュにとって、人間が生み出した思想のうちで何も確実なものは存在せず、真理は永遠に探求される状態にある。したがって、彼は『エッセー』においても、いかなる思想にも組することなく、加筆や訂正をくり返すことで、さまざまな主張を対立させつつ、つねに判断を保留しなければいけないのである。『エッセー』に見られる加筆や削除は、まさにこうした懐疑主義的な態度に由来しているのである。モンテーニュはそれと同時に、懐疑主義を高らかに標榜することで、彼はあらゆる話題について(自殺や宗教制度といったデリケートな話題でさえも)「多様な見解を書くことの自由」を正当化しようとするのである。

以上のように、モンテーニュの懐疑主義は、『エッセー』の執筆形式と付随的な関係にある

ばかりか、自由な発言を生み出そうとする権利を弁明してくれるものである。この点に関する論文の執筆は、今後の研究課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

久保田 剛史、「モンテーニュ『エッセー』における暴力の表象—フランス宗教戦争をめくって—」、『立教フランス文学』、査読有、41巻、2012、pp.37-49.

Takeshi KUBOTA, « Bataille de l'augustinisme : traduction française de la *Cité de Dieu* (1570) », *Inter Faculty* (University of Tsukuba)、査読有、3巻、2012、pp.51-58.  
<https://journal.hass.tsukuba.ac.jp/interfaculty/article/view/49/106>

[学会発表](計1件)

久保田 剛史、「フランス・ルネサンスに見る暴力の表象—モンテーニュの場合—」、『日本フランス語フランス文学会 2011 年秋季大会ワークショップ』、2011年10月9日、小樽商科大学

[図書](計2件)

久保田 剛史、高橋 信良、井上 櫻子、「フランス語動詞60—活用・用法・索引」、『朝日出版社』、2015、117 pages.

Takeshi KUBOTA, Sylvain ADAMI, Romuald BREFUEL, Jean-Alexi DONATI, *Entre les lignes : manuel de compréhension et d'expression écrites*, アシエット・ジャポン / フウヴェール出版、2015、73 pages.

[その他](計1件)

ベネディクト・ブードゥー、「モンテーニュと『祈りについて』」、『立教フランス文学』、41巻、2012、pp.23-36.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 剛史 (KUBOTA TAKESHI)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60555382